

インドネシアの輸出振興図書館支援奮闘記（特集 開発途上国における図書館の役割と支援活動）

著者	関根 成子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	126
ページ	24-25
発行年	2006-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005521

特集

特集／開発途上国における図書館の役割と支援活動

インドネシアの輸出振興図書館支援奮闘記

関根成子

●初めての国際支援

二〇〇二年の秋ごろ、インドネシアで地方貿易研修・振興センター（RETPC）を創設するという国際協力機構（JICA）の技術協力プロジェクトがあり、図書館運営について短期専門家派遣があるのでどうかとお話をいただいた。回国では、非石油・ガス部門の輸出競争力を強化することが大きな課題となっている。本プロジェクトは、雇用を創出し地方経済を支える地方の中小企業の育成と非石油・ガス部門の輸出促進を目的として立ち上げられたものである。RETPCは図書館による情報提供と地場産品のミニディスプレイをする輸出振興部門、輸出に必要な手続きや品質管理・マーケティングなどの研修を行う研修部門からなる。前者を中央政府のインドネシア輸出振興庁（NAFED）が、後者をもともとJICAのプロジェクトであったインドネシア貿易研修センター（IETC）がサポートする。開設前後は双方から三名ほど派遣されるが、同国は地方分権化を促進しており、二年後に地方政府に委譲され

る。プロジェクト期間中にスラバヤ、メダン、マカッサル、バンジャルマシンの四カ所を開設する。たまたまインドネシア語をかじったことがあり、ビジネスライブラリーでの勤務が七年になるので上司とも相談し、大好きなインドネシアのために少しもお役にたてばとお引き受けした。

●ござインドネシアへ

事前に情報収集し、言葉を勉強しなおして準備はしたものの、初めての国際支援では何をどのように進めてよいかわからなかった。そこで、現地事務局の方に相談した。その結果、まず、私が現地指導を行い、カウンタートパート（以下CP）がアクションプランを作成する。帰国後に日本で活動報告を作成し、アクションプランを踏まえた改善案をCPに提出する。それを現地事務局にフォローしてもらおう方法を進めることになった。私は二〇〇三年二月、二〇〇四年九月、二〇〇五年九月の合計三回派遣され最終的にはNAFEDがRETPCを支援し、協力して情報提供できるようにすることを目標とした。

最初の現地活動はジャカルタで、NAFEDとIETCの図書館職員、これから開設するRETPCに派遣される職員と合計十数名に対して図書館の仕事、協力体制の確立、レファレンス技術についてプレゼンテーションし、各テーマについて協議し、最後にアクションプランを策定した。後で情報の共有と集中管理を追加した。慣れないプレゼンにまごつきながら、片言でもインドネシア語を使うと、親近感を抱いてくれて、話を聞いてくれる。職員の問題意識は高い。しかし、中にはおねだりモードに入ってしまう職員もいた。

CPと話していくうちに現地事情が明らかになっていった。トップダウンが厳しく、上司に対して報告や提案がしにくいこと、研修を受けるとポイントが加算され（研修で身につけた知識を実践で活用しなくても）昇進につながる（異動する）こと、など公務員の中に広がる風土もプロジェクトの障害になっていた。また、組織内の情報を管理する図書館職員のステータスが低いことなどもある。同じ図書館員として「そうだよね、分かるなあ」などと妙に納得し



NAFED 職員による RETPC 職員のレファレンス講習
(JICA 現地プロジェクト事務局撮影)

て、お互いの苦勞を分かち合った。

他の部署にこのプロジェクトへの理解と協力を求めるために説明をして回ると、先々で図書館職員が、「その本発行したならすぐ頂戴、その資料もしまっておくならみんなのために図書館において」とだんだん「資料狩り」になってきた。普段はできないが一応専門家も一緒に、言いやすかったようだ。私の帰国後には五〇部ほど移管されたそうだ。今では各部の理解を得て、情報を図書館に集中し、共有するシステムが確立している。

次に最初に開所したスラバヤの RETPC を訪問した。そこでも、図書館の仕事やレファレンス技術、NAFED・IETC・地元の図書館や政府機関とどのように協力していくかを説明し、討論した。東ジャワの産業都市であるスラバヤでまずカルチャーショックを受けたのは、時間の流れが遅いことである。また、ジャカルタでの討論のように反応が返ってこない。ジャワ特有の風土であろうか、相手を否定するようなことはしない。かえって不安になった。ちょうど巡礼の月で、図書館の中心となる職員が巡礼に出ていて会えないなど宗教上の制約もあった。しかし、図書館を視察すると、配架もきちんとしており、関税品目コードの説明などもある。何も指示しなくてもこんなにちゃんとできるなら他の RETPC も同様にできるだろうと勝手に期待した。これが翌年、大間違いと分かった。

●二回目の訪問

二回目は NAFED・IETC のフォーリアップと、メダン・マカッサルの RETPC の訪問・指導であった。ジャカルタに着いて驚いた。昨年よりも CP の目が生き生きとしており、やる気満々で歓迎してくれた。NAFED は新しいビルに移転していた。CP の一人スリさんが案内してくれた。新しい図書館は明るく、整頓されていた。細かい点を指摘すると「そういう実践的な指摘を待っていたの」と言葉が返ってくる。前年に提案したこと全てが改善されたわけではないが確実に改善されている。職員的能力開発を勧めたところ、CP トップのラハユブディ氏の尽力で司書コースや語学研修に職員を出していた。上司にも勇気を持って意見する職員も出てきた。

RETPC を訪問して、今度は別の意味で驚いた。書架が大きすぎたり、配架計画が不十分であったり、受け入れ前の資料を配架したり。昨年訪問したスラバヤは優等生だったのだろう。あるいは不慣れな私がスラバヤの問題点に気づかなかったのかも知れない。同国は島嶼国で広く、全 RETPC の地理的条件が異なる。書籍や書架の入手が難しい地方もある。配架計画を立てることを勧め、少ない予算で蔵書を増やすために、関係機関に資料の寄贈・交換を依頼することなどを提案した。その結果、メダンは飛躍的に蔵書を増やしている。マカ

ッサルはなかなか軌道に乗れずいたが、へとへとになるまで議論し、改善のための計画を熱心に立てた。毎日頭の中でインドネシア語に翻訳しながら話す苦勞もこの CP の熱意によって半減した。

●三つよい総仕上げ

三年目はこのプロジェクトの集大成で、NAFED による RETPC 職員研修とマニュアル作成となった。NAFED で、全 RETPC 図書館職員を集めての研修を一緒に計画し、各 RETPC の現状把握、共通する問題点の洗い出し、レファレンス演習、アクションプラン策定をすることになった。初めて全 RETPC が一堂に会する研修で、まだまだ準備不足。今後の課題となるところも多いが、手ごたえはあったようだ。最後に作ったアクションプランも、帰国後に届いた CP の作ったマニュアルも、かなり具体的に実践向きの内容であった。今後 NAFED は指導的立場になる。情報量の限られる RETPC をサポートしなくてはならない。先日最後のプロポーザルを書き終え、全ての業務が終わった。NAFED では、さらに西ジャワ・バリ・中部ジャワに各州政府と連携してセンターを開設する予定である。インドネシアの貿易統計を見ながらこの国の輸出の伸びを見守りたい。

(せきね せいこ／日本貿易振興機構貿易投資相談センター)